

論文の概要および審査結果の要旨

氏 名（本 籍）	大利 恵子（高知県）
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	甲第 100 号
学位授与の日付	平成 30 年 3 月 25 日
学位授与の要件	佛教大学学位規程第 5 条第 1 項
学 位 論 文 題 目	摂関家領土佐国幡多荘再考
論 文 審 査 委 員	主 査 貝 英幸（佛教大学教授） 副 査 佐古 愛己（佛教大学准教授） 副 査 伊藤 俊一（名城大学 教授）

〔1〕論文の概要

土佐国幡多荘は、日本中世を通じて展開した荘園公領制のなかでも極めて特異な荘園として、荘園史研究のみならず中世史研究全般においてつとにその名を知られている。本論文は、その幡多荘を対象に、同荘領主である九条家および一条家と同荘との関係、一条家と関わりを有する足摺山金剛福寺と同荘との関係の検討を通じて、その実体解明を目指したものである。

論文は、序章以下、一章から五章および補論からなる本文、そして終章によって構成される。具体的な構成は以下に示す通りである。

序章

第一節 研究史の流れとその整理 一三つの研究視角から一

第二節 本稿の課題と構成

第一章 九条家領「土佐国幡多郡」の成立とその特質

はじめに

第一節 九条家領の成立と伝領

（一）九条家領の成立

（二）九条兼実による家領処分

第二節 九条道家の家領惣処分と関東伝領地

（一）道家による家領分与

（二）「女院方」と「新御領」

（三）「自関東伝領地」

第三節 「土佐国幡多郡」という存在形態

(一) 道家と家領処分時点の「幡多郡」の構造

(二) 地頭職か本家職か

おわりに

第二章 所謂「金剛福寺文書」に見る「先例」とその効用

—正嘉元年一一月付前摂関家政所下文写の検討を中心に—

はじめに

第一節 先例の始まり —金剛福寺と一条家

(一) 阿闍梨慶全が提示した故事と「先例」

(二) 弘睿の陳状・解状における故事と「先例」

(三) 「先例」の比較と展開

第二節 先例の成立 —その応用と影響

(一) 先例の成立—金剛福寺への再建援助と供養奉加

(二) 先例の増加—金剛福寺に対する特権の容認

第三節 金剛福寺の行動の背景

おわりに

第三章 中世幡多地域における金剛福寺の存在形態と地域社会

はじめに

第一節 在地の中の金剛福寺

(一) 一条家による奉加の実態

(二) 堂舎再建に見る地域的支援の実態

(三) 金剛福寺住僧とその周辺

第二節 幡多荘における金剛福寺の役割

(一) 観音寺領の代請について

(二) 香山寺「南佛領」の実態

(三) 香山寺に対する寺領譲与の本質

おわりに

補論 所謂「金剛福寺文書」について

第四章 長宗我部地検帳にみる戦国期の幡多荘 —「郡」と「庄」の表示からの検討—

はじめに

第一節 長宗我部地検帳における二種類の表示の存在

第二節 検地役人の認識と「庄」表示の特質

(一) 役人の編成と前任地における表示

(二) 「庄」「分」の表示とその特質

第三節 「幡多庄」表示と金剛福寺領

おわりに

第五章 室町末期幡多荘の実態と特質の検討

—『桃華蘂葉』『大乘院寺社雜事記』を主な材料として—

はじめに

第一節 室町末期一条家の家領とその経済

(一) 室町末期の一条家領

(二) 室町末期の一条家の経済

第二節 関東伝領地という由緒

(一) 幡多荘の伝領経緯

(二) 三ヶ所の鎌倉幕府伝領地の比較

第三節 一条教房幡多下向の性格とその成果から見える「幡多郡」の実態

(一) 教房の幡多下向における成果

(二) 幡多下向計画説の検証

(三) 知行地という認識

(四) 「幡多郡」における権力構造の変換

おわりに 一何が有名無実なのか

終章

第一節 各章の総括

第二節 幡多荘とは何か 一その実体と課題

まず最初に、各章の概要について述べる。

序章では、本研究が対象とする土佐国幡多荘についての一般的な理解を確認し、その理解がほとんど検証されず、また議論されないまま通説化している点を指摘するとともに、通説的な理解から派生する三つの問題に関する研究の歩みをたどりながら、本稿のねらい・目的である幡多荘の実体解明の必要性について述べている。

第一章は、13世紀前半に史料上に姿を現す幡多荘についての検証のはじまりとして、12世紀に成立し後に九条家領となる最勝金剛院領の伝領過程をたどり、幡多荘が九条家領となる経緯について検討し、併せて同荘の地理的構造、支配形態などを分析している。

第二章は、幡多荘の実態を伝えるほとんど唯一の史料が「金剛福寺文書」である点に着目し、九条家から同荘の領主の地位を引き継いだ一条家と金剛福寺との関係を考察している。特に金剛福寺による同荘に関わる申請とそれに対する一条家の応答の検討から、金剛福寺からの堂舎再建への援助要請をきっかけとし、一条家の累祖をも「先例」へと組み込みながら家門意識に訴えた巧妙な内容であったことを指摘している。

第三章は、金剛福寺が一条家から引き出すことに成功した諸権利のうち、金剛福寺と香山寺の関係について検証している。金剛福寺は、本来は関わりを有さない香山寺に対して、一条家から認められた特権を梃子に關係の構築を図り、それを寺領拡大活動へとつなげたことを述べている。

補論は、「金剛福寺文書」と称される史料群について、現在内容を知ることのできる複

数の刊本における史料点数、内容の異動について論じている。

第四章は、天正年間に長宗我部氏のもとで実施された検地を取り上げ、検地の結果をまとめた「地検帳」にみられる「庄」と「郡」のかき分けに着目し、幡多郡においては「庄」の記載が他郡とは異なる使われ方をしている点を指摘したうえで、「庄」として記載された村々が金剛福寺領と酷似する点を示している。

第五章は、土佐に下向した一条教房の父である一条兼良が著した『桃華藥葉』を題材に、同書における幡多郡（庄）の記述に着目し、兼良の幡多郡に対する認識が観念的であったことを指摘し、それこそが教房下向の理由であることを述べている。

終章は、これまでの諸章を総括し、明らかとなったことをまとめるとともに、幡多荘の実体について申請者の見解を述べている。

〔2〕 審査結果の要旨

土佐国幡多荘は、一郡全体が一荘園となった特異な例として知られている。おそらくこの理解は、荘園史研究を専らにする者でなくとも、日本中世の社会経済史上の重要事象の一つとして、広く学界の共通理解に属すると考えても差し支えなかろう。本論文はこうした学界の共通理解に再考を迫る意欲的かつ挑戦的な研究である。

本論文の特徴としてまず最初に指摘しておきたいのは、その構成において幡多荘をその成立から滅亡まで通時的に扱った点にある。通常一つの荘園を検討の対象とする場合、成立や滅亡など時期や問題を限定したうえで論究する手法が一般的である。そうしたなかにあつて本論文が採った手法は、やや特異といわざるをえない。これは筆者が序章で述べたように、「幡多荘を可視化し、新たな歴史像の提示を試みる」ことをねらったもので、決して浅薄な検証が散漫に繰り広げられた結果ではない。今後の課題を示すに止まった部分もあるとはいえ、成立から滅亡までを通じて「幡多荘」の見直しが必要であることは十分に示しえた。興味深い試みとして評価したい。

次に本論文の到達点として次の三点をあげておきたい。

まず第一に、藤原忠通の所領が、九条兼実、宜秋門院任子を経て九条道家へと伝領される九条家領成立の過程を丁寧に跡づけ、幡多荘が九条家領へ編入される事情を明示した。これまで九条道家の所領集積によるものと漠然と理解されていた同荘の成立および九条家領への編入を、鎌倉幕府との関係であったことを明らかにした。これにより、同荘が九条家領へ編入された時期が、幕府成立時期、ないしは道家の三男頼経が幕府将軍となった時期のいずれかであることに絞り込むことになった。また、複雑な経過をたどる九条家領の形成過程を緻密な検証によって跡づけた功績は、幡多荘に止まらず九条家領荘園の研究全般への寄与としても決して小さくはない。

次に、金剛福寺による寺領の拡大活動を二つの緻密な検証によってその具体像を示した。

第二章では、金剛福寺が荘園領主である一条家へ堂舎再建の要請を行う過程で提出した「解状」を綿密に分析し、そこに挿入された逸話が一条家や九条家さらには天皇家との関

わりを強調する形で創出されたものである事、さらに解状による申請が認められることにより逸話が「先例」となり、金剛福寺の在地での活動に一層有利に作用した事を論証、指摘した。また第三章において、金剛福寺院主南佛房慶全と心慶による香山寺包摂の動きを通じた寺領の拡大へとつながる過程が明らかにされており、この二つの検証を通じて、荘園内の寺院が立地上のハンデを克服し、寺領の拡大を実現する様子を具体的に示すことに成功した点で極めて貴重な成果といえる。

そして三点目として、「長宗我部地検帳」の分析を通じて、金剛福寺領の実体を明らかにした点があげられる。天正年間に実施された検地に際して作成された「地検帳」における「庄」「郡」の書き分けに着目した検証により、「幡多庄」と記載された村々の分布が、金剛福寺領の分布と酷似している点を指摘している。残存する地名を手がかりに曾ての「幡多庄」を浮かび上がらせただけでなく、金剛福寺領こそが「幡多庄」の実体であろうことを容易に推測させる結論は、荘園としての幡多庄が既にその姿を消している時期の史料にまで検証の目を向けた結果といえよう。

こうした成果の背景として、関連する史料を広く博搜しそれら全点について極めて丁寧な検討を施し、関連する歴史的事象と突合することによって理解を深め立論へとつながっている点も見逃せない。幡多庄に関わる史料として「九条家文書」や「金剛福寺文書」、「長宗我部地検帳」、「桃華薬葉」があげられているが、検討の材料として見た場合、それらは質的にも、また量的にも決して十分とはいえない。しかし本論文では、そうした史料の不十分さを、文書や記録の作成過程にまで踏み込み、記述の意図までも問う丁寧な検討によって補っている。考察の基礎となる史料に対する徹底的な検証は歴史学研究の基本とはいえ、ほぼ全編を通じて貫かれたこの姿勢こそが、氏の研究の基本でもある。これにより、これまでの研究が全くといってよいほど顧みてこなかった点を浮き彫りにしている。歴史学研究の基本が高度なレベルで達成された結果として高く評価できよう。

以上の諸点で、研究史を大きく進展させる可能性を有する一方で、いくつかの点で今後見直されるべき箇所も散見される。

そのひとつは、史料の解釈がやや強引になってしまった点である。本論文は先述した通り、徹底した史料収集がその特徴のひとつといえるが、史料から判明した事象を取りまとめる過程で、異なる解釈の可能性を十分に排除しないままに立論した箇所が散見された。例えば、第二章における地名の混濁が金剛福寺の意図によるものとの解釈や、第五章における一条教房の下向理由の解釈などがそれである。その結果、せっかくの検証作業を十分に生かしきれず、行論は強引な印象を与えることとなった。決して仮説に拘泥し推論を重ねたわけではないだけに、史料解釈の柔軟さが求められるところである。

今ひとつは、本論文第五章の記述内容にかかわり、下向した一条教房が幡多で展開した在地支配についての検証作業の不十分さである。室町期の土佐の在地の状況については、第5章で紹介されたいくつかの事例ではいささか心許ない。本論文が通時的な考察という手法を採った結果、解決すべき課題はいくつもの時代におよび、一つの論文で解決できる

問題の範疇を超えている。その意味では、本論文の構成の弱点が露呈した結果といわざるをえないが、著者の真のねらいが土佐一条家の研究である以上、本論文における記述は今後解決されるべき課題でもあり、室町期の土佐の状況については具体的な事例の発掘とともに一層の理解の進展を期待したい。

本論文は、これらの課題を有するとはいえ、それらは、著者が今後研究を発展させる過程で克服し、解決することを期待できるものであり、先述した意義を合わせて考えれば、論文としての成果を損なうとはいえない。よって、本論文は博士（文学）の学位を授与するに相応しいと判断する。